対面所

上段左の帳台構

上々段右の付書院と違棚

本願寺書院（対面所・白書院＝国宝）

本願寺の書院は、桃山時代に発達した豪壮華麗な書院造の様式の代表的なもので、座敷飾（床、違棚、帳台構、付書院）を完備し、金碧障壁画や彫刻で飾られています。書院は、対面所と白書院に大別でき、対面所の西側に雀の間、雁の間、菊の間などの小室があります。白書院の北側には装束の間があり、対面所と白書院のあいだに納戸が二室、両書院の周りに狭屋があります。対面所は寛永年間（1624～43）の造立で、白書院はそれよりやや古く、もとは別々の建物でしたが、後になって今のように接合されました。ほとんどの書院の障壁画は、渡辺了慶とその一派の筆になるもので、小室の雀の間は円山応挙門人の円山応瑞とも吉村孝敬の筆ともいわれています。

対面所上段正面の欄間

対面所（鴻の間）

本願寺の書院では一番規模の大きい広間で、ご門主との対面に使われたところからこの名があります。上段正面の欄間に雲間を飛ぶ鴻の透かし彫りがあることから、鴻の間とも呼ばれています。対面所の構成は上段と下段からなり、下段は一六二畳敷の広大な座敷で、二列の柱で三つに分けられています。また上段中央には間口の広い床、左端に帳台構、右端の上々段に違棚、付書院を配して、正面に一列に並べているのは御堂の形式を模したもので、本願寺独特の意匠といわれています。

上々段の手前にある軍配形の火灯窓